

第2回 浄土真宗ってどんな教えなの？

1 浄土真宗って仏教なの？

■ お釈迦さまの教説

現在の日本には、天台宗や真言宗・浄土宗・臨済宗・曹洞宗・日蓮宗など多くの仏教の宗派が存在しています。浄土真宗もその一つに数えられます。

では、なぜ様々な宗派があるのでしょうか？

お釈迦さまは相手の資質や能力・状況に応じて、その人にとって相応しい^{ふさわ}教説を説かれました。これを「対機説法」^{たいきせっぽう}（機に対して法を説く）といいます。

お釈迦さまが亡くなられた後、そのようなご説法を聞いた仏弟子たちによって、まとめられたものが「お経」（経典）です。したがって、様々な内容の経典が数多く残されています。

そして、経典はインドから中国へと伝えられ、漢字へと翻訳され、朝鮮半島を経て日本へと伝来しました。

多くの経典のなかで、どのお経をよりどころとし、またどのように解釈するかによって、様々な宗派が成立したのです。

親鸞^{しんろう}聖人を宗祖と仰ぐ浄土真宗では「浄土三部経」と呼ばれる三つのお経を正依^{しょうえ}（正しく^{まさ}よ^よるべき）の経典としています。

真宗(大谷派)の宗旨

- ご本尊 阿弥陀如来
- 正依の経典 浄土三部経
 - 『仏説無量寿経』 (大経)
 - 『仏説観無量寿経』 (観経)
 - 『仏説阿弥陀経』 (小経)
- 宗祖 ^{しんらんしょうにん}親鸞聖人
- 宗祖の著 顕浄土真実教行証文類 (教行信証)
^{けんじょうとしんじつきょうぎょうしょうもんるい}
- 日常のおつとめ (平常)
正信偈・念仏・和讃・回向・御文
- 宗派名 真宗大谷派
- 本山 ^{しんしゅうほんびょう}真宗本廟 (東本願寺) 京都



阿弥陀如来像 (阿弥陀堂)



真宗本廟 (御影堂)

2 他の宗派と何か違うの？

ろうしやうぜんあく

■ 老少善悪のひとをえらばれず

なぜ、僧侶なのに髪を伸ばしているのだろう？

浄土真宗のお寺にお参りされた時やご法事などで疑問に思われたことはないでしょうか。

一般的に僧侶というと、出家して厳しい修行をしたり、座禅をしたりするイメージを持たれているかと思います。実際、他の多くの宗派では戒律（修行者の生活規律）を守り、さとりを目指す修行が行われています。

親鸞聖人は生涯を通して、自らそしてあらゆる人にひらかれた仏道を求められました。その歩みから示される浄土真宗の特徴として、肉食妻帯・在家仏教といわれるものがあります。

にくじきさいたい

肉食妻帯・・・殺した生き物の肉を食べ、結婚して妻と家庭を持つこと

さいけぶつきやう

在家仏教・・・在俗の生活を営み仏道を歩むこと

当時そして明治以前、浄土真宗以外の宗派では、僧侶が肉を食べ妻をめとることは、戒律で固く禁じられていました。また、出家して世俗の生活をすて、仏道修行に専念できる環境に身を置くことが基本でした。

けれども、親鸞聖人が求められたのは、厳しい修行をしたり、世間との交流を断って仏道を求めることではなく、あるがままの生活を営み仏道を歩んでいくことでした。

その姿は一見すると墮落にも見えるかもしれませんが、しかし、仏教とは日常を離れた特別なものではなく、私たちが生きる日々の現実の中でこそ求められるものである。そのことを課題とし、歩まれたのが親鸞聖人です。

Q. 私たちは仏教に何を求めているのでしょうか？

親鸞聖人

親鸞聖人は、1173（承安^{じやうあん}3）年に京都に誕生し、平安時代から鎌倉時代にかけて生きられた方です。

9歳で出家され、20年間比叡山で厳しい修行と学問を積み重ねますが、山を下りる決心をし、吉水草庵をたずね法然上人と出遇われます。そして、本願念仏の教え^{きえ}に帰依されました。

老若男女・身分を問わず、あらゆる人に救いの道をひらくこの教えによって、多くの念仏者が生まれました。しかし、それまでの権威から強い反発を受け、法然上人は土佐へ、親鸞聖人は越後へ流罪となりました。

その後、聖人は関東に移り、その地で懸命に生きる人々と共に暮らし、本願念仏の教えを伝え続けていかれました。京都に戻られた後、1262（弘長^{こうちやう}2）年11月28日、親鸞聖人は90年の生涯を終えられました。



親鸞聖人（安城御影）

3 親鸞聖人は何を大切にされたの？

念仏成仏これ真宗

親鸞聖人は、9歳から20年間比叡山で過ごされましたが、29歳の時に山を下りる決心をされました。なぜ、親鸞聖人は比叡山を下りられたのでしょうか。

比叡山の教えは、厳しい修行によって自分の力で^{ほんのう}煩惱を断ってさとりを開くという〈自力・聖道門〉の教えです。しかし、その教えにしたがいどれだけ修行に励んでも煩惱を断つどころか、苦しみや悩みが深まるばかりでした。比叡山での修行をやめ、山を下りた親鸞聖人が出遇われたのが法然上人です。親鸞聖人は、法然上人が説かれていた「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」という〈他力・浄土門〉の教えに生きられたのです。

宗祖親鸞聖人は、師である法然上人との出遇いをとおして、阿弥陀仏に帰依して「南無阿弥陀仏」と称えることが、すべての人に開かれた平等な救いの道であるといたされました。

聖人は、生涯にわたる聞思のなかで『顕浄土真実教行証文類（教行信証）』を撰述し、その教えを「浄土真宗」と^{あきら}顕かにされました。浄土がまこと（真）のおね（宗）である、浄土こそがほんとうの依りどころであるということです。（東本願寺HPより）

自分の力ではさとりを開くことはできないと気づかれた親鸞聖人は、「本願を信じ、ただ念仏申せ」と伝えてくださった師の教えを大切にされ一生涯を通し聞き伝えていかれたのです。

親鸞聖人にとって「浄土真宗」とは、特定の宗派の名前ではなく、師によってあきらかにされた、自らの依りどころとなる真実の教えという意義を持つものです。



法然上人（絵像）

Q.何を大切に生きていますか？

親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。（中略）

弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教、虚言なるべからず。仏説まことにおわしまさば、善導の御釈、虚言したまうべからず。善導の御釈まことならば、法然のおおせそらごとならんや。法然のおおせまことならば、親鸞がもうすむね、またもって、むなしかるべからずそうろうか。

たんにしゅう
『歎異抄』 第二条

4 他力ってなんだろう？

■ 他力ほんがんりきというのは如来の本願力なり

「他力」または「他力本願」という言葉を聞くと、他人をあてにして望みを叶えようとする、あるいは他人まかせにすることをイメージされるかもしれません。浄土真宗においては、本願念仏の教えを「他力」の教えといただいてきました。

普段の生活のなかで私たちは何をたよりとして生きているのでしょうか。これまで積み重ねてきた努力や経験・常識など、自らの思い（考え）や能力をたよりとしているのではないのでしょうか。

自力じりきというのは、わがみをたのみ、わがころをたのみ、わがちからをはげみ、わがさまぜんごんの善根をたのむひとなり
『一念多念文意』いちねんたねんもんい

自らの力（自力）をたよりとして、思い通りにいった時には自分の成果と得意になり、思い通りにならない時には悩み苦しむ。そして思い通りにするためにときに他人（ひと）を傷つけることもあるのが私たちの姿ではないのでしょうか。

さるべきごうえん業縁ごうえんのもよおせば、いかなるふるまいもすべし 『歎異抄』第十三条

私たちがたよりとしている自らの力（自力）は、それほどあてになるものなのではないでしょうか。

私たちは因縁によって様々な関係の中にある存在です。因（原因）と縁（条件）によって左右される身であるからこそ、自分の力をいくらたよりにしてみてもすべてを思い通りに果たし遂げていくことはできません。

自分の力と思っていたものもあらためて見つめてみると、自分一人によって備わったものは何ひとつありません。しかし、私たちはそのことに気づかず、自分の力と錯覚したものをあてにする心（自力の心）を強く持っています。

そのような「自力の心」をひるがえし、他者と共にある自身の存在の事実を目覚めさせるはたらき（阿弥陀仏の本願力）を「他力」としていただいてきたのです。

先師の言葉

あてにならぬことをあてにしているからふらふらである （曾我量深）

私を生かしておる力というものに帰っていく歩み それが仏道 （宮城顛）

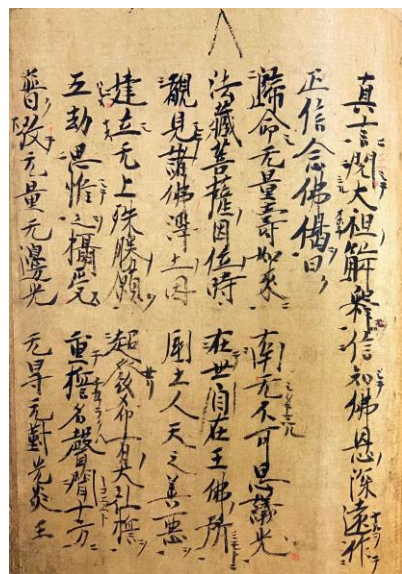
天命に安んじて人事を尽くす （清沢満之）

正信念仏偈(正信偈)

「正信偈」は、正式には「正信念仏偈」といい、親鸞聖人の主著である『教行信証』に記されています。親鸞聖人が受け取られた本願念仏の教えが偈頌という詩(うた)の形式で著されています。

「正信偈」は、真宗門徒が日ごろのおつとめに用いる聖教として、親鸞聖人の書かれたものの中でもっとも身近に親しまれてきました。

「正信偈」は、大きく分けて二つの内容からなっています。前半「難中之難無過斯」までは、お釈迦さまが阿弥陀仏の本願を説かれた『仏説無量寿経』に基づいて、「印度西天之論家」以降はお釈迦さまの教えを正しく受け止めてこられた七高僧の解釈をもとに著されています。お釈迦さまのお言葉と七高僧の解釈によって、仏の恩徳がまことに深いことが知らされた^たと讃えられています。



『教行信証』坂東本「正信偈」冒頭

「七高僧」

親鸞聖人が浄土真宗相承の祖師として敬われた、インド・中国・日本の七人の高僧。

「正信偈」や『高僧和讃』には、七高僧の徳が表されています。

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| インド：龍樹菩薩 (150-250年頃) | 天親菩薩 (300-400年頃) |
| 中国：曇鸞大師 (476-542年) | 道綽禪師 (562-645年) |
| 日本：源信僧都 (942-1017年) | 源空(法然)上人 (1133-1212年) |

親鸞聖人は「正信偈」を通して、仏教を本願念仏の〈他力・浄土門〉の教えとして明らかにし世に弘められた方々に思いを至し、また私たちにその教えを伝え勧められています。

自らをたよりとしそれぞれに異なる境遇を生きる私たちに、いつでも、どこでも、どんな時も、誰にも、はたらきかけている願いがあるのだと教え示されています。

「聖道門」

この世で自己の修行の力量で、さとりを開こうとする教え。(自力・難行道)

「浄土門」

阿弥陀仏の本願力によって、浄土に生まれてさとりを開く教え。(他力・易行道)

